不思議なご縁

今村三郎

二十世紀は、明治の日露戦争、大正の第一次世界大戦に続き、世界大恐慌に引きずり込まれ、我が国に於いても大不況となり、追い撃をかけるが如く関東大震災が発生、更に昭和となるや満州事変、日華事変が勃発し、第二次世界大戦へと突入、大激戦の末やがて終戦、国土は焼野ケ原と化しましたが、国民の英知と努力により、奇蹟的に復興、経済の高度成長時代を経て、バブル、間も無くバブル崩壊、超低成長時代の不況となっております一方、電子、原子、宇宙工学等の目覚しい発達を遂げた科学の世紀でもありました。その激動の二十世紀も最終年となり、輝かしい栄光に向い昇り竜の如き飛躍の二十一世紀を真近にひかえた本年は、辰歳であります。

辰歳の辰の字は、鈴木の商標の**凧**の辰と同じ辰であり、鈴木商店の商事部門の後継会社である日商株式会社も、辰年の昭和三年に創立されました。又、紀元二六〇〇年の昭和十五年も辰歳で、かの有名な世界に冠たる、零式艦上戦闘機が帝国海軍に正式に採用された年であり、更に西暦一九七六年の昭和五十一年も辰歳で、アメリカ合衆国二〇〇年のお目出度い歳でもあります。

私は日商と同じで、昭和三年の辰歳に生まれました。世の移り変わりに従い、平和な時代より太平洋戦争となり、本土も空襲が激しくなり、昭和二十年の春に隣組の方の疎開先の、兵庫県氷上郡の黒井町に疎開する事となり、母が私の転校手続の為に柏原中学校を訪問、植木孝之助校長と面談した際に「今村君のお父さんのお勤め先はどちらですか」と尋ねられ「大阪の日商株式会社に勤めて居ります」と、お答えしたところ「ホー、永井さんが社長をして居られる日商ですか」と、びっくりせられ「永井さんとは本校で同窓だったのですヨ」と、なつかしげに仰有られ、植木校長より暖かいご配慮を賜わりました。当時圧倒的優勢なアメリカ海空軍の猛攻撃下、父は日商厦門支店に単身赴任中で、長兄、次兄も兵役中であり、頼りになるものは何も無い心細い、初めての疎開先での、この暖かい親近感の溢れるお言葉は、母や私にとりまして、どれだけ有難かった事でしょう。この事は偏に、父にとりましても、又、私にとりましても、大先輩の永井幸太郎様のお蔭であります。世間は広いようで狭いものであると、云われている諺を実感として、身にしみて感じられました。それから三十四年の年月が経ち、昭和五十四年の秋に、永井大先輩の御影のお屋敷にお伺いして、お目にかかり、当時の事のお礼のご挨拶をさせていただける機会に恵まれ、誠に光栄の極みで今も振り返り、ほんとうになつかしい限りであり、私の人生の佳き思い出として、いつ迄も大切にして居るものであります。

昭和四十五年四月に、私は勤務会社である日新火災海上保険株式会社（鈴木商店と東京海上と関係の深かった東洋海上の後身会社）の大阪支店より、初めて四国の高松支店に転勤して、五年間に亘り、金子直吉翁、楓英吉様ご出身地の高知県、高畑誠一元会長ご出身地の愛媛県、落合豊一様ご出身地の徳島県、多賀二夫様、松尾守一様ご出身地の岡山県の由緒ある各地に、偉業を偲びつつ何回となく、出張が出来る光栄に浴する機会に恵まれました。そして昭和五十年四月に又、大阪に帰って参り、勤務会社より提供された社宅は、偶然にも、日商岩井が日本人の心の故郷でもある京都洛南の一角の桂川のほとりの一万坪余の広大な敷地に、力強く建設せられた、白亜の瀟洒な日商岩井桂川ハイツで、更に、屋上に掲示されている「日商岩井桂川ハイツ好評分譲中」の大看板の「日商」の二文字の眞下の部屋に住ませていただく事となり、誠に不思議なご縁であります。

一昨年の暮より、ＪＲ西日本の湖西線の近江舞子に住む事になりましたが、湖西線は、昨年ＮＨＫ大河ドラマの元禄繚乱の舞台の一つとなりました、大石内蔵助が一時期住んだ事のある京都山科で、東海道本線（愛称、琵琶湖線）より分岐し、近江塩津に至る七四・一粁、全線高架、踏切無しのオール立体交差で北陸本線のバイパスとして建設された在来線のトップクラスの高規格路線ですが、この沿線の今津町にある近江今津駅仕立の姫路行新快速電車は、嘗って、鈴木商店本店支配人をされて居た西川文蔵様のご出身地の今津を出発して、日商岩井、帝人のある大阪を通り、辰巳会本部があり、太陽鉱工と神戸製鋼所のある神戸を通り、鈴木商店主の鈴木よね様のご出身地の姫路に参ります。まるで辰巳会の様な電車で、私は京阪神に出る際よく利用させていただき、いつも心暖まる思いが致して居ります。

私の家内の孝子は昭和十一年の子歳生まれですが、鈴木よね様も子歳にお生まれとか。金子直吉翁も白鼠と号され又、作家の城山三郎さんの経済小説「鼠」は著名であります。

昨年の九月十一日に、いつも辰巳会で大変お世話になって居ります幹事の安東浄様より「明日十二日の日経新聞の特集記事、二十世紀日本の経済人に、金子直吉翁の記事が載るので読まれる様に」との、ご丁寧なお電話をいただきましたが、何と、その記事が掲載された九月十二日は、父、頼吉の満二十周年の記念すべき命日であります。誠に不思議なご縁であります。父は、金子直吉翁と親しくして居られた水島銕也神戸高商初代校長の薫陶を受け、大正九年に卒業後直に鈴木に入社させていただき、続いて日商、日協商事、辰巳会、日商岩井社友会と、生涯、鈴木に忠節を盡すを本分として居りましたので、或いは運命的な不思議な巡り合わせだったのかも分かりません。

以上、私事で恐縮に存じましたが、余りにも不思議なご縁と思われましたので、とりとめのない事を述べさせていただきました。

辰巳会と字の縁のある辰歳にあたり、辰巳会を初め、関係各社の益々のご繁栄と、会員の皆様方のご健康とご長寿を心よりお祈り申し上げます。

最後に、永年にわたり辰巳会の幹事をされ、私が大変お世話になりました柳田義一様より、辰歳男の私に下さった句をご披露し、筆を擱かさせていただきます。

雷鳴と共に栄光あれ昇り竜　　義一